

愛知県陶磁美術館所蔵 鈴木青々コレクションのイスラーム陶器片
—セルジューク朝からサファヴィー朝イラン陶器の
フリット・ボディへの視座から

A study on sherds of Islamic ceramics of the Suzuki Seisei collection

—From the view of the frit body of Iranian ceramics, from Seljuq to Safavid

長久智子

Tomoko Nagahisa

はじめに

故・鈴木青々氏（1914-1990）は愛知県瀬戸市を代表する現代陶芸作家のひとりとして活躍された。とりわけイランやエジプトを訪れて調査を行い、そうした西アジアの土器・陶器からインスピレーションを受けた作品を制作したことはすでによく知られている。さてそうして鈴木氏が生前、海外調査の折に収集されてきた地中海域・西アジア・東南アジアの古陶磁 164 件が、平成 3（1991）年度、ご遺族より愛知県陶磁資料館（現・愛知県陶磁美術館）へ展示・研究資料として寄贈された。この「鈴木青々コレクション」の中心を占めるのはやはり西アジア陶器で、紀元前 1000 年頃のペルシアの土器から 14 世紀のイラン陶器まで 92 件を数える。そのほか 39 件の西アジア・東地中海域製のガラス器があり、そのほか一括登録として「陶器片」が 1 件含まれている。本コレクション受贈以前の当館所蔵西アジア陶器類はわずかに 13 件であったから、この充実したコレクション寄贈が、その後の当館の西アジア陶器コレクション形成また調査・研究に大きな弾みをつけるものとなった。そのような中、この鈴木青々コレクションで未だ詳細に調査・分類されてこなかったものが残されているのをこのたび発見した。それが一括指定の「陶器片」（所蔵品番号 A-2211）である。

本稿ではこの鈴木青々コレクションの「陶器片」を調査・分類した上で、これまで看過されてきたこれらイスラーム陶器片に当館所蔵の陶磁資料としての価値を改めて付与する試みである。今回は特に、17 世紀から 18 世紀ヨーロッパ、特にフランスの軟質磁器と胎質に共通性を見いだせるサファヴィー朝イラン製白釉陶器、いわゆる「ゴンブルーン・ウェア」を念頭に、合成胎土の技術の視点から考察を進める。

1 陶器片の概要

（1）保管状況と出土地

鈴木青々氏がいつ頃これらの陶器片を収集されたのか、台帳には記録がなく不明である。これらイスラーム陶器片は、小さなカートンに土が付着したまま収められているものと、出土地・年代の書かれたラベルが貼られているものや、おそらく鈴木氏が特に興味を持って眺められたのであろう陶片類がガラ

ス蓋付木箱に並べた状態で収められているものと2種類に分けることができた。これら小さなカートンに収められた陶器片のひとつひとつには情報がないが、手書きのカードが添えられていた。ひとつは「SABARU サバル」、もうひとつは「AVEH アヴェー」と書かれていた。さらに、それぞれのカートンに「イラン 陶片」と書かれていた。そこでこれはいずれもイラン国内の表採地名と考えることができるが、「Sabaru」サバルという地名は見当たらない。そこで似たような語感の地名をイラン国内で探したところ、首都テヘランから東へおよそ400km、名高い窯業地のひとつであるニシャプールのそばに「Sabri」サブリという地を見つけた。今回、この「サバル」のカートンに収められていた陶片類は、おそらくこの「サブリ」での採集になると思われる。それは93片あり、中に石製容器片2点が含まれている。もう一方のカートンには「アヴェー」の地名が添えられていた。アヴェーは、テヘランと、やはり名高い窯業地のひとつであるカシャーんとちょうど中間にある町である。ここで採集されたと思われる陶器片は143片、石製容器片2点とガラス製容器片3点が含まれている。

最後に、ガラス蓋付木箱に特別に取り分けられた陶器片が85片あり、あわせて321点の陶器片がこのコレクションに含まれていることになる。そのほぼすべてがイラン陶器片である。

一方、ガラス蓋付木箱の陶器片は大きく4種類に分けることができる。ひとつは英文タイプされた出土地・時代ラベルが貼られたもの、もうひとつは和文手書きの出土地・時代ラベルが貼られたもの、和文墨書の出土地があるもの、そしてラベルのないものである。

英文タイプされた12点は一部ラベルが剥離した箇所があるものの概ね読み取ることができる。これは鈴木氏がおそらく海外で（あるいは現地・イランで）購入したものではないかと推測できる。和文手書きのラベルは2点しか見当たらないが、2枚のラベルは同じ手で書かれている。また、墨書で出土地が記されたものは5点あり、すべて「8月 '75 / アフガニスタン / バルク」と書かれている。ところがここでも「バルク」という地名が実在せず、その語感からおそらく首都カブールの近郊にある「Wardak」ヴァルダクというエリアではないかとみる。

最後にラベルのないもの68点がある。

(2) コレクションの特徴

11世紀半ば頃、セルジューク朝トルコの支配下にあったペルシア（イラン）では石英質のアルカリ・フリットを混ぜた白褐色の合成胎土を用い始めた。これを英語でFrit body「フリット・ボディ」とよんでいる。釉薬とこのフリット・ボディは溶け合って一体化し、白く、また可塑性に富むので薄く胎を造ることが可能となった。このフリット・ボディの断切面を拡大して観察すると「砂糖粒のような(Sugary)」テクスチャーがみえることも特徴である(註1)。鈴木氏の陶器片コレクションは、このフリット・ボディが使われ始めた12世紀から、14世紀くらいまでのものと、フリット・ボディ以前の赤褐色の粘土質の胎土を使う9世紀から11世紀くらいまでのものに大きく分けることができる。圧倒的な量を占めるのは12世紀から13世紀の、鮮やかな青釉・藍釉を施したフリット・ボディの陶器片である。さて鈴木氏の陶芸作品の特徴的な技法のひとつに、「彩砂磁(さいさじ)」と呼ぶものがある。フリット化した釉薬を作品表面に押し付けてから低火度焼成すると、鮮やかで色砂をまぶしたような表情を生む、鈴木氏の編み出した技法である。フリットとは釉薬原料を熔解した上でガラス状にし、細粒化したもので、低温で熔解する・安定した発色が得られるなどの利点がある。鈴木氏がおそらくこうしたイスラ-

ム陶器のフリット・ボディの技術や、銅青色（ターコイズ・ブルー）、コバルト青色（ネイヴィー・ブルー）の鮮やかな釉色に魅せられていたであろうことを陶器片の内容から伺い知ることができる。

2 鈴木青々コレクション・イスラーム陶器片の中のフリット・ボディ

鈴木氏が特に選り分けていた 85 片の中から、12 世紀から 13 世紀にかけての典型的な作例を抽出し、以下に詳細をみてゆきたい。

(1)

通番 7

青釉刻文容器片（図版番号 7）

幅 7.1cm × 4.8cm 厚 0.5cm

12 世紀後半 -13 世紀前半 おそらくカシャー、イラン

復元口径 15cm 程度の碗の一部。刻文とともに、胎が五分乾きの頃針先で突いて胎に小さな装飾の穴を開けている。この上から施釉することでピン・ホールはガラス質の被膜に覆われて、ステンド・グラスのように釉の色の光を透かす効果を生む（参考図版 1）。いわゆる「蛍手（ほたるで）」とよぶ装飾は人気があり、本例のような青釉のほか、緑釉を掛けるものや、流し掛けたコバルト彩の上に透明釉を掛けたものなど多くの作例がある（参考図版 2）。鈴木青々コレクションにはほかいくつかこの「蛍手」タイプの陶器片が見出される。

胎はグレー味を帯びた白褐色で、細かい黒粒が混じる典型的なフリット・ボディである（参考図版 3）。

(2)

通番 11

ラスター彩容器片（図版番号 11）

幅 9.2cm × 6.8cm 高台径 6.2cm、高台高 1.1cm 厚 0.6cm

12 世紀 -13 世紀前半 おそらくカシャー、イラン

酸化錫を混ぜることで白濁させた鉛釉を薄く掛けた上に、赤みを帯びたラスター彩顔料で人物図を施した碗の見込み部分。高台見込み部分には淡くコバルト彩を施している。復元径 15cm 程度で、同様の作例は多い（参考図版 4）。高台脇から口縁へ大きく開くラスター彩容器の典型的なフォルムであったと考えられる。これは当時の金属器のフォルムに由来している。胎土は白褐色のフリット・ボディで、やや夾雑物が多い（参考図版 5）。フリット・ボディの作例は概して手取りも打音も軽いが、本作例のようなフォルムの容器は胴下部から見込み部分が厚いために重さを感じる。

(3)

通番 18

白釉押出文容器片（図版番号 18）

幅 8.0cm × 7.0cm 厚 0.4-0.3cm

12 世紀第 2 四半期 -13 世紀初頭 カシャーまたはニシャプール、イラン

型押しで人物像頭部を押し出したもので、長頸瓶のチューリップ型にひらく注ぎ口付近の造形と考え

られる。こうした薄手の型押しの容器はカシャーで制作されたと考えられるが、レイやニシャプールでも作例と型が発見されているという（註2）。中には非常に繊細な型を使用し、コバルト彩を併用した作例もある（参考図版6）。本作例も人物像の額部分に流し掛けのコバルト彩がわずかに残っている。釉層は非常に薄く、胎土によく密着している（参考図版7）。これは胎に含まれるアルカリ・ガラス質と、アルカリ釉が結合しているからとされる（註3）。胎は白褐色のフリット・ボディである。手取りは非常に軽い。おそらく通番17の容器片（ラベル「Ney ■ r, (I) ran / ■ Century」、ニシャプール出土か）と同器である。

(4)

通番26

青釉裝飾片（図版番号26）

幅4.4cm × 3.9cm 厚0.6cm

10世紀 伝ゴルガン出土、イラン

ファイアンスとは石英を細粒化したペーストに極微量の粘土・釉を加えた胎を焼結し、施釉したもの。胎と釉は分離しにくくするために素地に釉の成分を加えている。紀元前4000年紀にメソポタミア地方で普及し始めた技術（註4）で、本稿のフリット・ボディも「ファイアンス」の一種である。拡大観察してみると、胎と釉はほぼ同じ粒状の質感（いわゆる「sugary」な白い粒が固まった）を呈しており、両者がほぼ同じ成分であることを示唆している（参考図版8）。

(5)

通番33

青釉白盛上容器片（図版番号33）

幅11.9cm × 13.3cm 高2.7cm 厚0.6-0.5cm

13世紀後半-14世紀 おそらくカシャー、イラン

碗か鉢の見込み部分である。いわゆる「スルタナバード陶器」と呼ばれるもので、白化粧ののち、白土で動物・植物文様を盛り上げ、黒彩で縁取りを施し透明釉を掛けたもの。本作例の化粧土は緑味を帯びたもので、これは中国からもたらされる青磁の色を模倣したものと考えられている（註5）。「スルタナバード」とは制作地とされる地名であるが、おそらくカシャーでの制作と考えられている。胎はラスタ彩容器などと同じ、やや荒いフリット・ボディである（参考図版9）。高台見込みは兜布に仕上げ、白化粧を施している。

(6)

通番58

白地上絵容器片（図版番号58）

幅3.6cm × 3.0cm 厚0.5-0.3cm

12世紀後半-13世紀前半 おそらくカシャー、イラン

通番62

白地金彩上絵容器片（図版番号 62）

幅 1.8cm × 3.6cm 厚 0.6cm

12 世紀後半 -13 世紀前半 おそらくカシャー、イラン

いわゆる「ミナイ手」の陶器片である。碗の口縁部分の一部とみられる。「ミナイ」とはペルシア語で「エナメル（上絵）」の意。白地に釉中彩の雰囲気、コバルト、銅青（ターコイズ・ブルー）彩を加え、透明釉を掛けて 900-1000°C 程度で一度焼成したのち、さらに上絵を施して 800°C 程度で焼成したもので、狙い通りに発色させることが難しい技術であった。特に「通番 62」の作例では金箔貼でアラビア文字が表わされており、とりわけ上手の作品として制作されたことが伺える（参考図版 10）。胎は白褐色に黒粒が混じるフリット・ボディ（参考図版 11）。

（7）

通番 80

白釉藍彩容器片（図版 80）

幅 7.5cm × 8.0cm 厚 0.6cm

14 世紀 おそらくカシャー、イラン

中国・龍泉窯青磁の劃花蓮弁文碗を写したスタイルの碗の一部で、外側面を蓮弁文が廻る。コバルト彩、黒彩、銅青（ターコイズ・ブルー）彩は釉下彩である。碗の見込み部分は放射線状に画面が分割され、細かく文様が描かれる上質のタイプである（参考図版 12）。釉は良く溶けて透明感がある。胎は薄手で、白褐色のフリット・ボディである（参考図版 13）。ちなみに鈴木氏は特にこの白地藍彩容器片を多く収集している。セルジューク朝時代のイラン陶器の中で、カシャーで始まったこの釉下コバルト、マンガ（黒）彩技法はこの時期にアルカリ釉の仕様によって完成され、以降のイラン陶器の主流となっている（註 6）。

以上 6 点の陶器片は制作年代が多少前後するものの、フリット・ボディは同じ色調・質感を示していることから、おそらくイランのカシャーで制作されたと考えられる。

そのほか、鈴木コレクションの陶器片には粘土質の青釉・藍釉陶器も混じるものの、フリット・ボディを用いた青釉・藍釉陶器が「サブリ出土」「アヴェー出土」陶片に多く混じっており、12 世紀から 13 世紀頃のイラン陶器の合成胎土の諸相をみることができる。

3 17 世紀イラン陶器にみるフリット・ボディとヨーロッパ陶磁との比較

これまで鈴木青々コレクションのイラン陶器片のフリット・ボディをみてきた。そこで今度は、17 世紀から 18 世紀にかけて制作されたサファヴィー朝イランの最上級のフリット・ボディの作例をみてみる。サファヴィー朝イランはアッバース 1 世（1571-1629、在位 1587-1629）の治世にオスマン朝トルコから故地を奪取するなどして最大域の領土を支配し、最盛期を迎えた。即位後の 1597 年、アッバース 1 世は首都をイスファハーンへ移し、この当時世界最大級の大都市が国内外の交易の一大拠点となった。さらに 17 世紀にはイギリス東インド会社、オランダ東インド会社の商館もここへ置かれ、ヨーロッパとの交易は一段と盛んになっていった。

さて、フランス人宝飾品商人ジャン・シャルダン（1643-1713）が1673年にイスファハーンを商用旅行した時の記録である『ペルシア見聞記』（1686）には、ペルシアの陶器について、以下のようなよく知られた記述がある。

（前略）瑠璃をかけた器とか陶磁器とわれわれが呼ぶものもまた、彼らのもっとも美しい製品のひとつである。これはペルシア中どこでも作られる。もっとも美しいのはファールス地方の首邑シーラーズ、バクトリア地方の首邑マシャド、カラマニー地方のヤズドとケルマン、そしてとくにカラマニー地方のザランドという町で作られる。この磁器の内部も表層部の土も中国の磁器と同じ純粋な瑠璃質で、粒子は同じように細かく透明であるから、しばしばこれに騙されて中国製とペルシア製の見分けがつかなくなる。ときにはペルシアの製品の質が中国のそれを上回ることもさへあるくらいで、それほど釉薬のかけ方に力があって美しいが、ここで私が比較にだした中国の製品は、古陶器ではなくて当代もののことである。（後略）

『ペルシア見聞記』（岡田直次訳、平凡社、1997、p.266）

中国製磁器にそっくりなこの最上質のやきものを扱うオランダ人は「ペルシアと中国の磁器をまぜこぜにして」輸入しているとシャルダンはいう。今日、このやきものはGombroon ware「ゴンブルーン手」と呼ばれる白釉陶器の一群を指すものと考えられている。「ゴンブルーン」とはオランダ東インド会社、イギリス東インド会社がヨーロッパへの商品輸出港として使っていたホルムズ海峡北岸の地名で、今日ではバンドル・アッパーズと呼ばれている。バンドル・アッパーズは前述のヤズド、ケルマン、シーラーズ、イスファハーンを結ぶ中継点であった。このいわゆるゴンブルーン・ウェアは、おそらく1660年代から1690年代にかけて中国磁器の輸入がストップしていた時期、そしてその後も1800年代初頭にかけての間、ヨーロッパへ、特にイギリス人によって輸出されたと考えられている（註7）。

（1）

刻文透かし碗（「ゴンブルーン・ウェア」）

ヴィクトリア&アルバート美術館所蔵 所蔵 No. 2594-1876

口径 20.6cm 高 9.2cm（参考図版 14-18）

1650-1725年頃 おそらくケルマン、イラン

非常に胎が薄く、透光性に優れている。フォルムは中国磁器の模倣であるが、透かし彫り文様はイラン風である。そのフリット・ボディは白く、非常に細かい粒のそろった粒子がなめらかに溶着しているので、ややマットなすりガラスの表面とも似ている。アルカリ透明釉は透質で、やや青味がかった。

（2）

刻文透かし脚付鉢（「ゴンブルーン・ウェア」）

ヴィクトリア&アルバート美術館所蔵 所蔵 No. 1399-1876

口径 20.7cm 高 10.6cm（参考図版 19-21）

1650-1725年頃 おそらくケルマン、イラン

胎は同様に薄い、こちらは透かし彫り装飾がさらに細かく全面に施されている。またクローム黒彩、コバルト彩も併せて用いており、ゴンブルー・ウェアの中では極めて珍しい装飾性豊かなグループに属する。アルカリ透明釉は透かし彫りを埋めるためやや粘りがあり、角で釉溜まりを作っている。硬質磁器のような厳しいフォルムはこうしたフリット・ウェアには難しく、エッジの弱い滑らかな面変化は後述するフランスの軟質磁器とも共通している。胎は（1）同様細かな粒が見え、また釉と胎は一体化している。胎と釉の伸縮率の違いをなくすために、ボディに釉の成分を混ぜているためと考えられる。

一方、これらサファヴィー朝イランの最上質白釉透彫製品がヨーロッパへ輸出されたのと同時期の17世紀末、フランスでもガラス質の合成胎土を使用したいわゆる「軟質磁器」と呼ばれるフリット・ボディのやきものが生まれた。パリ近郊のファイアンス窯であったサン＝クルー窯はその嚆矢で、1690年代に軟質磁器の焼成に成功している。

（3）

コバルト彩碗

ヴィクトリア&アルバート美術館所蔵 所蔵 No. 225&A-1869

口径 7.0cm 高 7.0cm （参考図版 22-23）

1695年頃 -1710年頃 サン＝クルー窯、フランス

手取りの重いカップである。サン＝クルー窯ではガラス質の砂を60%、そのほかに白土、石灰などを混ぜた合成胎土で、磁器の白さ・硬さに似せたやきものを焼成した（註8）。本作例では鉛の透明釉はわずかに青味を帯びて釉だまりを高台見込みに作っている。その胎はほぼ溶結し、釉とも一体化している。サン＝クルー窯での胎土調合レシピは不十分なものしか残っていないが、1690年から1700年頃と考えられている極めて初期の試作品（参考図版 24-26、口径 16.9-13.7cm、高 8.6-9.0cm、個人蔵）では胎が焼成に耐え切れず窯割れている。また胎の色そのものも淡褐色で、黒い夾雑物も目立つ。それが1695年から1710年頃の作例（参考図版 27-28、口径 6.8cm、高 4.4cm、個人蔵）になると（3）の作例同様、胎はしっかり融着している。

作例（1）、（2）のようなサファヴィー朝の白釉フリット・ボディの技術とサン＝クルー窯の軟質磁器との比較についてはすでに1698年、パリ郊外のサン＝クルー窯を訪れたイギリス人医師によって言及されている（註9）ものの、これまではサン＝クルー窯製品と中国製磁器（徳化窯の白磁、いわゆる「ブラン・ド・シーヌ（中国の白）」）や、日本・有田窯の柿右衛門様式の色絵磁器の影響関係について言及するものがほとんどであった。しかしほとんど同時期に現れたイランとフランスのフリット・ウェアの胎がこのように非常に似通っていることを考えると、とりわけ胎土についてはサファヴィー朝イランのフリット・ウェア（ゴンブルー・ウェアを含む）となんらかの影響関係にあることは明らかである。ほかのサファヴィー朝イランの陶器類に比べて極めて完成度の高いこのゴンブルー・ウェアがヨーロッパへ運ばれた量は非常に少ないとされているが、1715年から1723年までルイ15世の摂政を務めたフィリップ・ドルレアン（オルレアン公、1674-1723）のコレクションやザクセン選帝侯アウグスト1世（1670-1733）のコレクションにこのイラン製白釉陶器が収められているという（註10）。

こうしたイラン製フリット・ウェアからの推測される影響以外に、サン＝クルー窯と関連づけること

ができる作例はあるだろうか。軟質磁器というガラス質の合成胎土の使用でいえば、さかのぼること16世紀に、ペルシア経由で輸入された中国製の軸下彩コバルト磁器（青花磁器）を真似てトスカーナ大公国・フィレンツェでフランチェスコI世・デ・メディチ（在位1574-1587）の下で1575年頃から約10年間のみ製作された、いわゆる「メディチ磁器」がある。

(4)

コバルト彩鉢

ヴィクトリア&アルバート美術館所蔵 所蔵No. 5760-1859

口径31.8cm 高14.0cm 高台見込みにコバルト彩「(フィレンツェの花の大聖堂ドゥオーモ) / (-F-)」
(参考図版29-32)

1575年-1587年頃 「メディチ磁器」、フィレンツェ、イタリア

大型の鉢で、口縁部分の橋反りなどに中国・明時代の景德鎮窯製磁器の影響を看とることができる。「メディチ磁器」と呼ばれる一群は今日およそ60点ほどの作例が確認されている。フィレンツェ共和国は15世紀から16世紀にかけてオスマン朝トルコと交易を行っており、この試作品的なフリット・ボディのやきものも、中国製硬質磁器の直接的模倣というよりは、同じくフリット・ボディをもつトルコのイズニク陶器から技術的影響を受けていると考えられる。

しかしながらこうした白色で透光性の高いガラス質胎土の合成技術は手間と費用がかかるために一度絶えてしまっており、およそ100年後のフランスでの、同様の胎を持つ「軟質磁器」焼成の背景にはむしろこの「メディチ磁器」の失われた技術より、同時代的に輸入されていたサファヴィー朝イラン製フリット・ウェア「ゴンブルーン・ウェア」からの刺激を考えてよいのではないだろうか。

このように、これまでほとんど触れられてこなかったヨーロッパのフリット・ウェアとイランのフリット・ウェアの関係性について今後さらに精査していくことで、イラン陶器のフリット・ボディ技術、ヨーロッパの軟質磁器の技術が果たした役割についても陶磁史の中で、また貿易・文化交流史の中でその重要性が増すものと思われる。

おわりに

鈴木青々コレクションのイスラーム陶器片には、12世紀から13世紀、14世紀のイラン製フリット・ウェアが数多く含まれている。これらのフリット陶器片は、断切面にまだ出土した時のまま砂が硬く付着したままであるものも多い。それをきれいに取り除いてゆくと、予想以上に白いボディが現れてくる。それは赤褐色の粘土質のボディに白化粧を掛けていた陶器類からの大きな技術的進展である。17世紀に登場したとされるサファヴィー朝イラン時代の白釉陶器の薄く、白いフリット・ボディや、フランス軟質磁器を考える上で、これら12世紀から13世紀の陶器片のボディ、またその釉薬を知ることが欠かせない基礎認識となる。今回は総目録作成もあって、中には調査が不十分な陶片もある。制作地、年代、そして技法など、今後も引き続き整理をしてゆく予定である。

なお、今回の整理・調査では触れなかったが、鈴木氏はイスラーム陶器片とは別に、古代の土器片も相当数残されていた。こちらも整理を進める予定である。

鈴木氏はこうした陶器片・土器片だけではなく、完形品のイスラーム陶器も併せて収集されていた。それらも陶片類とともにご遺族から当館へ寄贈され、多くは常設展示室で展示させていただいている。今回の整理で特に良いサンプルとなるような陶片も、今後はそれらと併せて常設展示することで、より一層の内容充実を図ることができるだろう。

謝辞

故鈴木青々氏がかつて現地で収集された貴重な陶片資料をご寄贈いただきましたご遺族のみなさまに深く感謝いたします。また快く貴重な所蔵作品調査をお許しくださいましたヴィクトリア&アルバート美術館（ロンドン）、また格別のご高配を賜りました Mrs. Pamela Roditi にも深謝いたします。

また、本稿は公益財団法人ポーラ美術振興財団による平成 27 年度 調査研究助成「17 世紀から 18 世紀におけるフランスの軟質磁器の基礎研究 ―ヴァンセンヌ窯および初期セーヴル窯を中心として」の成果の一部です。ここに記して篤く御礼申し上げます。

註

- 1 Watson, O. "CERAMICS FROM ISLAMIC LANDS", Thames & Hudson, London, 2004, p.507.
- 2 三上次男監修、『世界陶磁全集 21』小学館、1986、p. 272、作品 151 の解説（エシン・アトゥールによる）を参照のこと。
- 3 岡野智彦「イスラームの青」『青 空と水とやきものはじまり』（展覧会図録）INAX ライブミュージアム、2011、pp. 44-45.
- 4 月本昭男監修、『メソポタミア文明の光芒 楔形文字が語る王と神々の世界』、山川出版社、2011、p. 118.
- 5 前掲註 1、p. 385.
- 6 前掲註 2、杉村棟「東方イスラーム世界の陶器―シリア、イラク、イラン、アフガニスタン、中央アジア―」 p. 142
- 7 McWilliams, M. "In Harmony: The Norma Jean Calderwood Collection of Islamic Art", The Harvard Art Museum, Cambridge, 2013, p.200. また、時代は下るもののイギリスに 1800 年代のイギリス製装飾金具を取り付けたゴンブルーン・ウェアが伝世している。現・アジア美術館アヴェリー・ブランデー・コレクション（サンフランシスコ）所蔵（所蔵 No. B60P2300）。Komaroff, L. "Gifts of the Surtan", Yale University Press, London, 2012, p.232 および fig.225 参照。
- 8 Rondot, B. "Discovering the secrets of soft-paste porcelain at The Saint-Cloud Manufactory : ca. 1690-1766", Yale University Press, New Heaven and London, 1999, pp. 40-41.

9 Martin Lister, “*A Journey to Paris in the year of 1689*”. V&A の所蔵ゴンプルーン・ウェア (所蔵 No.1395-1876) の作品解説に、このことについて言及あり。

10 前掲註 9、V&A による作品解説。

参考図版出典

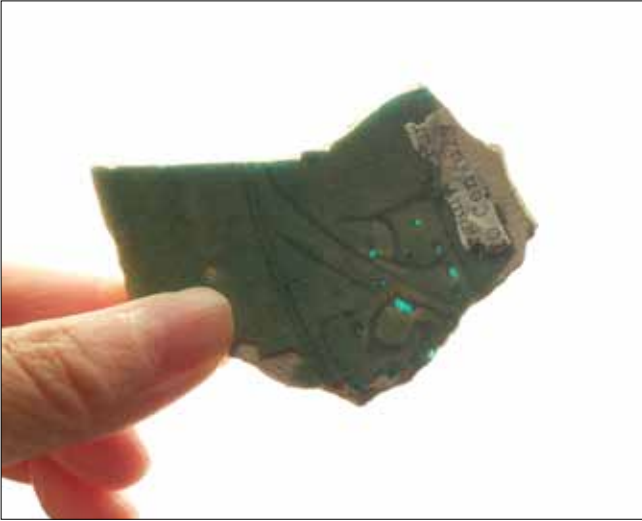
1, 3, 5-10, 13-32, 筆者撮影

2 Watson, O. “*CERAMICS FROM ISLAMIC LANDS*”, Thames & Hudson, London, 2004, p.320.

4 Ballian, A. “*BENAKI MUSEUM OF ISLAMIC ART*”, Athens, 2006, p.105.

11 前掲 2、p. 388.

33 前掲 2、p. 429.



参考図版1 「青釉刻文容器片」(図版 No. 7) の透かし文部分



参考図版2 青釉刻文透かし鉢 口径18.5cm 高8.5cm
12世紀後半-13世紀前半、イラン クウェート国立美術館所



参考図版3 「青釉刻文容器片」(図版 No. 7) 断切面拡大



参考図版5 「ラスター彩容器片」(図版 No. 11) 断切面拡大



参考図版4 ラスター彩騎馬人物文鉢 口径18.4cm
カシャー、イラン ベナーキ美術館(アテネ)所蔵



参考図版6 白釉狩獵文鉢 12世紀後半-13世紀前半
フリット・ボディに施釉 ルーヴル美術館所蔵（所蔵 No. MA02073）



参考図版7 「白釉押出文容器片」（図版 No. 18）断切面拡大



参考図版8 「青釉裝飾片」（図版 No. 26）断切面拡大



参考图版9 「青釉白盛上容器片」(图版 No. 33) 高台接地面部分扩大



参考图版10 「白地金彩上繪容器片」(图版 No. 62) 金彩文扩大



参考图版11 「白地金彩上繪容器片」(图版 No. 62) 断切面扩大



参考図版 12 白釉藍彩鉢 口径 22.2cm 高 9.2cm
おそらくカシャー、イラン クウェート国立美術館所蔵



参考図版 13 「白釉藍彩容器片」(図版 No. 80) 断切面拡大



参考図版 18 刻文透かし鉢 (V&A 所蔵) 高台部分拡大
「ゴンブルー・ウェア」 おそらくケルマン、イラン



参考図版 16 刻文透かし鉢 (V&A 所蔵) 見込み



参考図版 14 刻文透かし鉢 (V&A 所蔵) 側面 1



参考図版 17 刻文透かし鉢 (V&A 所蔵) 底部



参考図版 15 刻文透かし鉢 (V&A 所蔵) 側面 2



参考図版 21 刻文透かし脚付鉢 (V&A 所蔵) 高台部分拡大
「ゴンブルー・ウェア」 おそらくケルマン、イラン



参考図版 19 刻文透かし脚付鉢 (V&A 所蔵) 側面



参考図版 20 刻文透かし脚付鉢 (V&A 所蔵) 見込み



参考図版 22 コバルト彩碗 (V&A 所蔵) 側面
サン=クルー窯、フランス



参考図版 23 コバルト彩碗 (V&A 所蔵) 高台部分拡大



参考図版 25 コバルト彩鉢（個人蔵）底部
サン＝クルー窯の初期製品、フランス



参考図版 24 コバルト彩鉢（個人蔵）側面



参考図版 26 コバルト彩鉢（個人蔵）底部接地面拡大



参考図版 27 コバルト彩塩皿（個人蔵）
サン＝クルー窯、フランス



参考図版 28 コバルト彩塩皿（個人蔵）部分拡大



参考図版 32 コバルト彩鉢 (V&A 所蔵) 断切面拡大
「メディチ磁器」、フィレンツェ、イタリア



参考図版 29 コバルト彩鉢 (V&A 所蔵) 側面



参考図版 31 コバルト彩鉢 (V&A 所蔵) 高台裏銘



参考図版 30 コバルト彩鉢 (V&A 所蔵) 見込み